



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

190

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 女子差別からみえる 日本のガラパゴス化

東京医大での入学試験の採点時、女子学生の合格者を少なく抑えるよう人為的操作がなされていたことが発覚した。官僚との贈収賄がらみの事件の解明を進める中、偶然に近い形で判明したと聞く。なんとということかと呆れた人も多いことだろう。

しかし、もつと驚いたのは、東京医大の方針に賛同する声が少なからず存在するという事実だ。「女子の方が優秀なのだから、操作せず普通に採点すれば、医者は女性ばかりになってしまおう」、「女性医師は、ハードな勤務を望まず皮膚科や麻

酔科を選ぶ傾向が強いので、意図的な操作なしでは医師不足は加速化するばかり」と堂々とテレビでタレントが発言したかと思えば、あるアンケートでも、東京医大の方針を「理解できる」と答えた現役男性医師が半数以上を占めていた。

事前に何の告知もなく、受験料だけ徴収しておきながら採点に手を加えるとは、それだけで立派な犯罪といえる。先の発言や東京医大に理解を示す医師たちの存在はともかく、まずはまっとうな正義感を持たないことが何より恐ろしい。事実はその通りでも、そこで現実

を容認してしまつては何も変わらない。ジェンダーギャップ指数という女性の活躍度を推し量る指標がある。世界経済フォーラムが、2006年より各国の経済、教育、健康そして政治の4つの分野について男女格差をスコア化し、



ジェンダーギャップ指数として各国のスコアおよびランキングを発表している。2014年の世界平均スコアは、0・676。つまり、社会において女性性は男性の70%程度の存在感・活躍度であるというイメージだ。教育と健

康の分野では女性のスコアはもつと高いが、経済・政治となると、やはり男性に比べてやや劣つてしまうこともわかつている。日本のスコアは0・658と平均以下、114位である。最も高いのは、アイスランドの0・859で、2位がフィンランド0・845、ノルウェーの0・837と続く。上位を北欧が占め、次いでヨーロッパ諸国が登場、意識して急速な近代化を進めているニカラグアやルワンダがベスト10に入るなど奮闘している一方で、日本や韓国などアジアの国々は押しなべて低い位置にある。

日本では、とりわけ政治分野で活躍する女性が極端に少ない。北欧や欧州では女性のリーダーは決して珍しくないのに比べ、日本ではなかなか女性政治家の顔は見えない。むしろ、女性が前に出ようとすると皆で寄つてた

かつて潰そうとする気配さえある。ジェンダーギャップ指数が高い国は、LGBTなどのマイノリティにも理解が深い。ベルギーの首相（男性）が恋人（男性）の肩を抱いてインタビューを受けていた姿は印象的だった。ちなみにベルギーのスコアランキングは、第10位である。

日本では、女性の与党女性議員がLGBTを「生産性がない」と堂々と切り捨てる発言をして話題になった。東京医大と考え方の根っこは同じ。しかも、女性が女性を差別しているに等しいことに本人は気づいていない。これまた感度の悪い政治家がいたものだ。日本のガラパゴス化は、性分野でも著しく進んでいる。そのことをまずは恥じるところからすべてが始まり変化を遂げる、……かもしれないと期待を持ちたい。

イラスト・伊藤栄章